

ジェンドリンのプロセスモデルとその臨床的 意義に関する研究

末武, 康弘 / SUETAKE, Yasuhiro

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

307

(発行年 / Year)

2014-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675乙第215号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2014-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010249>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	末武 康弘
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 215 号
学位授与の日付	2014 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(2)該当者(乙)
論文審査委員	主査 教授 長山 恵一 副査 教授 清水 幹夫 副査 関西大学教授 池見 陽

「ジェンドリンのプロセスモデルとその臨床的意義に関する研究」

〔1〕本論文の受理および審査の経過

末武康弘氏より 2013 年 5 月 10 日に博士論文審査願が提出されたことを受けて、同 5 月 15 日人間社会研究科教授会において受理審査委員会（委員：石井享子、長山恵一、清水幹夫、伊藤正子）が設置された。受理審査委員会は、受理審査（一次）の結果、論文受理審査発表会での発表を承認することとし、同年 6 月 19 日の教授会で承認された。同年 7 月 20 日に、論文受理審査発表会を実施し、受理審査委員会は受理審査（二次）の結果、論文を受理することとし、同年 7 月 31 日に教授会で承認された。同日、教授会において論文審査小委員会（委員：長山恵一、清水幹夫、池見陽）が設置された。各委員が論文の査読を行った上で、同年 11 月 9 日に口頭試問を実施し、3 名の審査委員全員が博士論文として合格に値すると判定した。

〔2〕論文の主題と構成

本論文はジェンドリンのプロセスモデルの哲学・思想的な意味内容の解釈とその臨床的意義に関する研究である。ジェンドリンは来談者中心療法を創始したカール・ロジャーズとともに心理療法の世界に新たな臨床実践の可能性を模索し、その理論化を試みた人として世界的に知られている。ジェンドリンは来談者中心療法（いわゆるロジャーズ学派）の論客として、その治療論の体験過程論はわが国でも村瀬孝雄氏をはじめとして早くから着目されてきた。ジェンドリンはその後、フォーカシングという治療技法を開拓し、今では単なるロジャーズ学派の枠組みを超えて、フォーカシング指向セラピー（*focusing-oriented therapy*）と呼ばれる心理療法の実践・研究の潮流が世界的に起きている。末武康弘氏は筑

波大学大学院の修士論文研究の時代から、約30年間、ジェンドリン研究に一筋に取り組んでおり、ジェンドリンと個人的な交流を深めつつ、ジェンドリンの臨床実践やその背景にある思想を日本に紹介し、今では氏は我が国のジェンドリン研究の中心人物として知られるようになっていく。

ジェンドリンの治療技法やその治療論は心理療法の本質を深くついたものであるために、実践家にとって学派を超えて理解しやすい。このため、日本のジェンドリン研究は今までどちらかという治療実践や治療技法に偏ってきたきらいがある。ジェンドリン自身もともとプロの哲学者であるため、彼が新たに創造した臨床諸技法の思想的源泉に一步踏み込もうとすると、そこにはきわめて難解かつ広大な哲学思想的世界が展開することになる。世界的なジェンドリン研究を見渡しても、その研究は彼の哲学・思想的な著作群に焦点を当てた思想的研究か、あるいは逆に彼の臨床実践や治療技法に焦点を当てた研究のどちらかに二分される傾向がある。ジェンドリンの思想的、臨床的な全体像を論じるためには、その研究者に思想・哲学的な深い素養とともに、実践家に必要な臨床的センスという言わば異質な二つの才能が要求される。ジェンドリン研究の領域において、末武康弘氏はこの両者を併せ持った研究者・実践家として世界的にも評価が定着しつつある。

本論文は、これまでに発表された諸論考を加筆修正したものに、新たに書き下ろした論考を加えてまとめ、ジェンドリンの哲学思想的な思索が彼の臨床実践にどう結びついているかを総合的・体系的に考察し、それを学位請求論文として提出したものである。

本論文は、序論（4章）と本論第I部（6章）、第II部（8章）、第III部（3章）、および結論（2章）で構成されている。その構成は以下のとおりである（各章の節は省略した）。（なお、総計302頁からなる下記の論文本文のほかに、資料として末武康弘氏が全訳したジェンドリンの「プロセスモデル」（324頁）が添付されている）。

序 論

1. 本論文の意図
2. ジェンドリンのプロセスモデル
3. 先行研究
4. 本論文の内容と構成

本 論

第I部 臨床的問題としてのジェンドリン哲学——プロセスモデルへの展開——

1. はじめに——ジェンドリン哲学へのアプローチ——
2. 体験過程、シンボル、意味——体験過程論の展開——
3. 夢、身体、隠喩——現象学的方法による夢解釈——
4. 体験の複雑性、自我と非自我、身体感覚が導くプロセス——ナルシシズム概念批判と社会的提言——
5. インプライング、生起、進化——プロセスモデルの臨床的含意について——

6. (第 I 部の補遺) ジェンドリンからの手紙とそこから得られた応答的秩序

第 II 部 ジェンドリンのプロセスモデル——その解説と考察——

1. はじめに

2. プロセスモデル第 I 章、第 II 章、第 III 章

3. プロセスモデル第 IV 章 身体と時間

4. プロセスモデル第 V 章 進化、新しさ、安定性

5. プロセスモデル第 VI 章 行動

6. プロセスモデル第 VII 章 文化、シンボル、言語

7. プロセスモデル第 VIII 章 暗在するものによる思考

8. (第 II 部の補遺) プロセスモデルの臨床的意義を抽出するための基礎的作業

第 III 部 プロセスモデルの臨床的意義を実例化する試み——パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化——

1. はじめに——研究の意図——

2. パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化の試み

3. プロセスモデルの臨床的意義の実例化

結 論

1. 本論文の成果

2. 今後の課題

〔3〕論文の概要

「序論」では本論文の意図を論じ、ジェンドリンとそのプロセスモデルについてその輪郭を述べ、国内外の先行研究を俯瞰し、本論文の内容と構成を示している。

「本論」第 I 部では、ジェンドリンの哲学が、『体験過程と意味の創造』(1962) から『プロセスモデル』(1997) へと、どのように展開されてきたのかを、特に臨床的な問題関心との繋がりが深い代表的な論文に焦点をあてることによって考察している。第 I 部の 1 と 2 では、ジェンドリンの体験過程 (experiencing) という根本概念が、どのような背景から、どのように創出されたのかを検討し、また『体験過程と意味の創造』の主要な論点を明らかにしている。『体験過程と意味の創造』の中でジェンドリンが論じた、感じられる意味 (フェルトセンス) とシンボルの機能的関係——直接照合 (direct reference)、再認 (recognition)、展開 (explication)、隠喩 (metaphor)、把握 (comprehension)、連関 (relevance)、婉言 (circumlocution) ——の提示は、私たちのあらゆる意味の形成や使用にはフェルトセンスが必ず何らかの形で関与している、ということ为例証するための論考だった。また、そのことから導かれた IOFI (instance of itself) 原理——私たちのフェルトセンスからもたらされる実例は、新しいカテゴリーや普遍性を生み出す可能性をもっている、とする原理——についても、その企図するところを明らかにしている。

また第 I 部の 3 および 4 では、ジェンドリンの哲学が臨床的な問題——夢の解釈やナルシシズムの概念に潜む仮定など——に適用され、交差することによって展開されていった軌跡について論じている。このような問題への取り組みは、哲学者であり、かつサイコセラピストでもあるジェンドリンによる、きわめてオリジナリティに富んだ論考である。こうしたジェンドリンの仕事について、哲学や思想と、またサイコセラピー実践のいずれをも広く見渡すことができるような立ち位置から考察が加えられている。

また第 I 部の 5 では、ジェンドリンの『プロセスモデル』の主に前半部についての考察に基づきながら、その臨床的含意を明らかにしている。その結果、プロセスモデルには、①人間の根源的な体験世界についての新たな認識、②人間がもつ表象やイメージについての新たな理解、③精神病理について新たな概念や理論が生み出される可能性、④「治療的停止 (therapeutic stoppage)」などのサイコセラピーの実践にもたらす示唆、といった臨床的含意が認められることが明らかにされた。さらに第 I 部の補遺では、(上記の議論にかかわる問題についての) ジェンドリン本人から著者に届いた手紙を訳出し、その内容に解説と考察が加えられている。

第 II 部では、ジェンドリンの『プロセスモデル』の第 I 章から第 VIII 章までの全体について、その解説と考察が行われている。まず、ジェンドリンによって『プロセスモデル』が執筆された経緯と、その全体的な構成について論じ、さらに、このモデルが要請する基本的な視座——①インタラクショナルファースト、②過去と未来が現在において機能する時間のモデル、③プロセス事象、④非ラプラス的連続、⑤1つの事象を形成する多数の要因、⑥ユニットの出現、および異なる仕方での再出現——を抽出し、検討がなされている。そして、第 I 章「身体 - 環境 (BODY-ENVIRONMENT)」、第 II 章「機能的循環 (FUNCTIONAL CYCLE)」、第 III 章「対象 (AN OBJECT)」、第 IV 章「身体と時間 (THE BODY AND TIME)」、第 V 章「進化、新しさ、安定性 (EVOLUTION, NOVELTY, AND STABILITY)」、第 VI 章「行動 (BEHAVIOR)」、第 VII 章「文化、シンボル、言語 (CULTURE, SYMBOL AND LANGUAGE)」、第 VIII 章「暗在するものによる思考 (TINKING WITH THE IMPLICIT)」のそれぞれについて、次々に創出される新しい用語や概念の意味を解説しながら、その難解な内容について、理解が及ぶような形で考察が加えられている。

ジェンドリンのプロセスモデルとは、いったい何についてのどのようなモデルであり、理論なのだろうか？ 本論文の解説と考察から明らかになったことは、次のことである。すなわち、ジェンドリンのプロセスモデルとは、生命体や人間、そして自然がまさにこのようにあるあり様を、このあり様において——つまり、何かほかのあり様に還元したり、転換したりせず——正確に描き出し、そしてそのあり様から、いったいどのようなさらなるあり様が生起できるのかを見通そうとする、そのような哲学的作業の結晶である、ということである。

一般に何かの「モデル」とは、数学的・論理的なモデルや、構造的な型としてのモデルの意味で使用されることが多い。しかし、ジェンドリンのプロセスモデルでは、そのよ

うな還元的なモデルはいっさい描かれない（『プロセスモデル』の中で唯一の図は、時間の生成と進行を表す「シータ（ θ ）の図」という奇妙なもののみである）。むしろ、「インプライングの中への生起（*occurring into implying*）」という起源的な表現に始まる独特の記述によって、これまで言語化、あるいはモデル化されたことのない、しかし生命体や人間にとって根源的であり、まさにそのようなあり様でしかあり得ないようなあり方が、徐々に明らかにされている（別紙資料「ジェンドリン『プロセスモデル』用語集」参照）。

ジェンドリンのプロセスモデルは、ある意味では、生命体と人間の進化論と呼べるような哲学である。もちろんこの作品は、一般的な意味での生物学的な進化を論じたものではないが、少なくとも生命体や人間の発展や進化は、このプロセスモデルにおける重要なテーマの一部である。そしてジェンドリンは、プロセスの「停止（*stoppage*）」あるいは「休止（*pause*）」によって、プロセスに分化——それまでのプロセスの停止と、それまでにはなかったプロセスの生起——が生じ、新しいプロセスが形成されていくようになる、という根源的なあり様から生命体の発展や進化をとらえようとしている。このようなプロセスの停止と分化、その発展から行動が生じ、またシンボルや言語が形成されるようになる、という第Ⅵ章から第Ⅶ章にかけての論述はまさに圧巻である。これまでこのような形で、行動の発生や言語の形成のプロセスを連続的に解明した理論や哲学は存在したのだろうか。きわめて難解で複雑な第Ⅶ章の記述のためか、ジェンドリンのプロセスモデルにおける言語の形成の考究については、これまでほとんど考察や議論が行われてこなかったが、本論文の第Ⅱ部の考察によって、今後さまざまな議論が行われることが期待される。

しかし、ジェンドリンのプロセスモデルの最大の成果あるいは真骨頂は、言語や文化が形成され発展した第Ⅶ章を超えて、その先へとどのように進展していくことができるのかを明らかにしようとする、その第Ⅷ章にある。第Ⅵ章や第Ⅶ章における停止（あるいは休止）のあり方と、第Ⅷ章のそれが明らかに違うのは、Ⅷにおける（長い）休止が、人間の意思によるものであり、そこには真の意味での主体性が存在している、ということだろう。ジェンドリンは、それに取り組んだ先駆者として、モダンバレエの祖であるイサドラ・ダンカン（*Duncan, I.*）、演劇界の改革者スタニスラフスキー（*Stanislavski, K.*）、相対性理論のアインシュタイン（*Einstein, A.*）ら（および、その人たちが残した自伝や文章）を例示する。そして、このⅧにおける新しい連鎖の形成を導くのが「直接照合体（*Direct Reference: DR*）」という、全体的で創造的な身体感覚である、とジェンドリンは言う。第Ⅷ章では、この直接照合体に導かれる新たな連鎖について、「モナド（*monad*）」および「ダイアフィル（*diafil*）」といったタームを用いて考究されている。

第Ⅲ部では、第Ⅰ部および第Ⅱ部での理論的な検討をふまえたうえで、ジェンドリンのプロセスモデルがサイコセラピーをはじめとした臨床実践にもたらす意義について実践的な視野からの検討が行われている。第Ⅲ部の 1 では、著者自身の臨床経験について、それを「パーソンセンタード／フォーカシング指向セラピー

(person-centered/focusing-oriented therapy: PC/FOT)」と位置づけることの意図と背景が論じられ、また、研究の方法論としての TAE (thinking at the edge) ——プロセスモデルから導き出された理論構築法——の特徴が考察されている。

第Ⅲ部の 2 では、PC/FOT のサイコセラピストとして実践を行ってきた著者自身の臨床経験を素材としながら、TAE を質的分析の方法論として活用することで、PC/FOT で生起するプロセスの理論化が試みられている。具体的には、真正 (bona fide) な PC/FOT として著者が担当した 25 ケースについての面接記録と筆者の振り返りをデータとして、TAE による質的分析を行い、PC/FOT のプロセスについての概念化と理論化が試みられている。そして、次のような 5 つの様相からなる PC/FOT のプロセスが記述される。

様相Ⅰ：反復する非律動的なヴァージョニングへの共感的響応

様相Ⅱ：混乱の鎮静化

様相Ⅲ：シンボリックな閃光の発現

様相Ⅳ：隠喩的な調律

様相Ⅴ：律動的个体化が個人文法的型に沿って姿を為す

第Ⅲ部の 3 では、上記の理論化の中で導き出された主要なタームがとり上げられ、それらの意味づけが行なわれ、これらのタームが PC/FOT、およびサイコセラピー全般の実践や研究の中にどのような意義をもたらしうるのかが考察されている。そこから重要な論点が導き出され、以下のような仮説的命題が提起されている。

仮説的命題 1：PC/FOT——そして、多くのサイコセラピー——は、クライアントの未構成な身体的インプライング (pre-constituted bodily implying) が、より律動的で秩序的、調和的な動きによって推進されていくプロセスを援助しようとする働きかけである。

仮説的命題 2：人間のさまざまな心理的苦悩や精神症状は、それらが動かない歪形 (デフォルメ) された構造のように見える場合でも、非律動的なヴァージョニング (nonrhythmic versioning) によって反復されているのであり、そのヴァージョニングの連鎖は再構成化される可能性に常に開かれている。

仮説的命題 3：クライアントの非律動的なヴァージョニングの動きが、自らそれをストップさせようとしても止めることができないような「停止の不全」あるいは「止まらないプロセス」であるような場合、治療的停止 (therapeutic stoppage) と呼ぶような働きかけが重要な意味をもつ。これはクライアントの混乱の鎮静化のための重要な 1 つの道筋である。

仮説的命題 4：共感的響応 (empathic resonating) とは、PC/FOT のセラピーにおける最も核心的な働きかけの 1 つであり、それは、クライアントの反復する非律動的なヴァージョニングに対して、セラピストがそれを正確に、身体的に、相互作用的にヴァージョン化する——しかも自らの律動性を失わずに——ことである。そこにはヴァージョニングの二重化——非律動的であり、かつ律動的であるような——が生起する。

仮説的命題 5：PC/FOT においては、シンボリックな閃光 (symbolic gleam) は、クライアントに変容や推進をもたらす重要で貴重な事象として生起する。シンボリックな閃光は、

非律動的なヴァージョニングとは異なる連鎖を生み出し、未構成な身体的インプライングを秩序的に再構成化し、推進する可能性をもつものである。

仮説的命題 6：隠喩的な調律（**metaphoric attunement**）とは、クライアントの中のシンボリックな閃光がヴァージョン化され連鎖化していき、それがさまざまな側面と交差し、隠喩的にその意味が響き合い、連関していくような動きのことである。ここに生じるのは、反復する非律動的なヴァージョニングとはまったく対照的な、シンボリックな閃光のヴァージョニングであり、その連鎖化である。

仮説的命題 7：律動的個体化（**rhythmic individualizing**）とは、生命体が一人ひとり微妙かつ複雑に異なるその心身の機能をよりスムーズに秩序的に発現する動きである。その生起は、個人文法的型（**personal grammatical form**）と呼べるようなその人独特の構造と機能の現れ方のパターンに沿って姿を為すようになる。このような動きが十分に獲得される時、それはさまざまな問題への汎用性をもつようになるので、サイコセラピーは真の意味で終結される。

この第Ⅲ部の議論は、ジェンドリンのプロセスモデルと著者自身の臨床経験の交差の試みであり、また、プロセスモデルの臨床的意義を著者の臨床経験から実例化する試みでもある。

最後に、「結論」では本論文の成果をまとめ、あわせて今後の課題が論じられている。

〔4〕論文の総合的評価

本論文のオリジナリティや意義は以下の点にある。

第 1 に本論文では、ジェンドリンの哲学が初期の哲学的作品である『体験過程と意味の創造』から『プロセスモデル』に至るまでに、どのように発展し展開されてきたかを、特に臨床的な問題関心との繋がりが深い代表的な論文に焦点をあてることによって考察している。これまでは『体験過程と意味の創造』についても、（心理学や心理臨床の領域においては）ほとんど言及や考察が行われてこなかったが、本論文では『体験過程と意味の創造』および他の論文を解説することを通して、プロセスモデルへと至るジェンドリンの哲学的な仕事が、その問題意識や問題追及の方向においていかに一貫しており、透徹したものであるかが明らかにされている。この作業を通じて、これまで認識されてきた以上に、ジェンドリンの哲学が私たちの臨床実践を振り返る際の確かな基盤になり得ることが確認された。

第 2 に本論文は、日本国内のみならず世界的に見てもいまだ十分に行われてこなかった、ジェンドリンのプロセスモデルの全体的な内容を明らかにした世界で初めての研究である。ジェンドリンの哲学的作品の頂点とも言える『プロセスモデル』はきわめて難解であり、それがどのような哲学でありモデルであるのか、その全貌を解説したうえで考察した研究はこれまで存在しなかった。本論文ではそのための基礎作業として『プロセスモデル』を全訳し、その訳を用いて詳細かつ精密な解説が行われている。今後、ジェンドリンのプロ

セスモデルについては、本論文の——特に第Ⅱ部における——説明をもとに、さまざまな理解や議論が行われていくことが期待される。

第3に本論文は、ジェンドリンのプロセスモデルの臨床的意義——サイコセラピーをはじめとした臨床実践にもたらす意義——を、著者自身の臨床経験を分析することを通して明らかにしている。具体的には、プロセスモデルから導出された概念形成・理論構築の方法としてのTAE (**thinking at the edge**) を用いることで、著者が実践してきたパーソンセンタード／フォーカシング指向セラピー (**person-centered/focusing-oriented therapy: PC/FOT**) におけるプロセスの理論化を試みている。その分析によって、PC/FOT (および他のサイコセラピー) において暗々裏に気づかれ経験されてはいたが、明確に概念化されてこなかったプロセスや相互作用についての新たな用語と仮説的命題が導き出された。ジェンドリンのプロセスモデルおよびTAEを、サイコセラピーをはじめとした臨床実践に活用しようとする研究はこれまでもなされてきたが、ここまで詳細かつ系統的な研究は初めてであり、今後、プロセスモデルやTAEが臨床的な問題探求にどのように適用されていくかについて1つの道筋を切り拓いた研究と言える。

第4に本論文は、これまでパーソンセンタードセラピーが他の心理療法学派からしばしば批判、あるいは指摘されてきた点について新たな展開可能性が示されている。パーソンセンタードセラピーは心理療法に重要な動的・流動的な体験プロセスを重視するあまり、その逆の現象、つまり抵抗や防衛、あるいは構造拘束的と言われる硬直的な心的現象とそうした動的・流動的な体験が相互にどのような力動的関係を持つのかが明確でなく、従来から、パーソンセンタードセラピーは治療の後半部分にのみ着目していると批判を受けてきた。この点はパーソンセンタードセラピー、ひいてはPC/FOTが理論的・実践的に今後さらなる発展を遂げ、他の心理療法諸学派と実りある対話を行うためにはきわめて重要な点である。これについて、著者はプロセスモデルの中に「治療的停止 (**therapeutic stoppage**)」という機制を見出し、著者自らの臨床経験を踏まえて、その機制の臨床的な含意や重要性をジェンドリン本人との手紙のやり取りの中から明らかにしたことはパーソンセンタードセラピーやPC/FOTの今後の発展の突破口となり得るものであり、それは同時に他の心理療法学派との実りある対話を可能たらしめる世界的な業績とあって過言ではない。

以上のことから、本論文における議論によって、今後、PC/FOTのさまざまな実践的展開のみならず、プロセスモデルを土台としたPC/FOTの哲学や、TAEを中心とした研究方法などの展開、さらにはプロセスモデルの中の「治療的停止 (**therapeutic stoppage**)」という機制を鍵に他のサイコセラピーの分野全体の中におけるPC/FOTの位置づけや布置が明確化されていくことが期待される。

最後に、今後の課題として取り組むべき点を指摘したい。

(1) ジェンドリンのプロセスモデルについては本論文の解説と議論によってもなお明らかになっていない論点がまだ残されているので、引き続き探求の作業が行われなければなら

らない。また、他のさまざまな哲学や思想、臨床理論との比較研究も今後の不可欠な作業として残されている。

(2) 本論文の TAE を用いた臨床的研究では、PC/FOT のプロセスを理論化するための仮説的命題を導いているが、これまでの PC/FOT や他のサイコセラピーのプロセス理論との比較検討や、より実証的で仮説検証的な研究が今後の課題として残されている。

(3) 本論文の資料として提出されているジェンドリンの「プロセスモデル」の全文邦訳は、今後のジェンドリン研究の基礎資料としてきわめて貴重であり、著作権の問題をクリアして何らかの形で公にされることが望まれる。また、「治療的停止 (therapeutic stoppage)」にかかわる著者の考察部分については、パーソンセンタードセラピーや PC/FOT に対する他の心理療法諸学派からのこれまでの批判を紹介しつつ、その実践的・理論的な意味を英文・邦文で公表することは他学派との交流を促進する点で強く求められるものである。

〔5〕論文審査結果

以上により、論文審査小委員会は、末武康弘氏提出の論文「ジェンドリンのプロセスモデルとその臨床的意義に関する研究」について、博士（学術）の学位が授与されるのに十分な資格を有するものとの結論に達した。